

隣から見た 北海道

# 大河に架ける橋



外務省 在バングラデシュ日本大使館  
1等書記官 榊原 佳広

## 1. 「黄金のベンガル」

バングラデシュに着任して早くも1年半が過ぎましたが、皆さんはバングラデシュという国をご存じでしょうか？ バングラデシュはインドの東のベンガル湾に面し、ガンジス川、ブラフマプトラ川、メグナ川の河口に位置する国です。正式名称はバングラデシュ人民共和国（People's Republic of Bangladesh）であり、古くは英領インドに属し、インド独立後、ヒンドゥー教徒とイスラム教徒の軋轢を原因として1947年にイスラム教徒がパキスタンとして分離独立した際に、1,800km離れた飛地（東パキスタン）として共に独立、その後1971年に、バングラデシュとして独立した国です。日本は最も早くバングラデシュを独立国家として認めた国の一つであることもあり、バングラデシュは、親日家が多いためです。第2次世界大戦時代は、インパール作戦などのビルマ戦線に程近い東部のコミラ市に、英連邦軍の前線基地と野戦病院があったとのことで、コミラ市のモエナモティ連合軍人墓地の片隅に

は、敵であった日本人兵士捕虜24名も英国軍によって手厚く埋葬されています。

バングラデシュの国旗は緑地に赤い丸でいわゆる日章旗タイプで、日本の国旗の白地を緑地にしたデザインとなっています。緑は「黄金のベンガル」とノーベル文学賞作家タゴールに謳われた豊かな大地を、そして赤は独立戦争で亡くなった人たちの血を表しているといわれます。国土面積は14万3,998平方キロ、北海道の倍にも満たない狭い国土で、1億4,000万人以上が暮らしています。ちなみに国土面積は、ヒマラヤ山脈から流れてくる土砂によって形成される中州の拡大によって、少しずつ広がっているという現象が起きています。主食は米で、首都ダッカから一歩出ると地平線まで一面田圃という日本の穀倉地帯と同じ景色が広がっています。国土のほとんどがいわゆるデルタ地帯であることから、平坦で農作には適している反面、洪水・高潮・サイクロンなどの被害を受けやすい構造になっています。また、人口密度は1,000人／平方キロに達し、世界有数の人口過密国家でもあります。ダッカは、145平方キロの面積に1,300万人が住んでいるという世界有数の人口過密都市です。



## 2. ダッカ名物？ 交通渋滞

ダッカ市内の道路は、自動車、日本の人力車を語源とした自転車タクシーの「リキシャ」、天然ガスエンジンを積んだオートリキシャの「CNG」が入り乱れている状態で、まさに混沌としています。渋滞の原因は、交通量もさることながら、交通マナーの欠如に起因するものが多いように感じます。二重右左折当たり前、曲がった先が詰まっているのに右

折して対向車線をふさぐ、前が詰まっていれば分離帯があろうが関係なく対向車線を逆走する等何でもありの状態ですから、渋滞するのも当然といえば当然でしょう。私が体験した最も激しい渋滞は、2kmの移動に1時間を要したほどです。まさに、「歩いた方が早い」という状態でした。最近は大きな交差点には警官が立つようになり、少しは流れが良くなっていますが、4方向4現示で流すので、交差点での待ち時間は長くなっています。

### 3. イスラムとゴミと貧困と

大きな交差点には、物乞いが大勢いて、止まっている車の窓をノックして廻ります。手足の無い人、目の見えない人、赤ん坊を抱えた女性、ストリートチルドレン…。この国はイスラム教の人が90%を超える国であり、ムスリム（イスラム教徒）にとっては、貧しいものに施しを与えるのは、「バクシーシ」といわれ、コーラン（イスラムの聖典）に則り善行であり、自らの功德となるため、お金を与える人も少なくないようです。一人当たり年間GDPが500ドルに満たないこの国では、自家用車に乗れるのは裕福な人だけであり、物乞いも自家用車に集中します。中にはCNGの乗客に施しを求める人もいます。外国人であれば、道を歩いているだけでも声をかけられます。彼らも半ばプロのようで、「10タカ（約15円）くれ」「いま50タカ札しかないから」「大丈夫、40タカおつり出すから」のような話や、50パイシャ（0.5タカ）をあげたところ、怒った顔で投げ返されたとかの話も聞いたりします。

また、生活環境も劣悪で、ゴミはそこらにポイ捨てするのが常識であるようで、あちらこちらにゴミが散乱しています。また、ゴミを拾い集め、分別してリサイクル材として売ることによって生計を立てている貧困層の人々がいますが、彼らも生ゴミは集めてはいきません。こうした状況下で、日本はクリーンダッカと銘打って、廃棄物処理のための技術協力を実施中です。ちなみに、マーサーというコンサルティング会社の調査では、ダッカは世界で2番目に汚れた都市としてランクされているようです。もっともこの調査は、ゴミの問題ではなく、環境汚染の酷い都市のランキングのようですが。



### 4. 経済と発展

そうは言いながらも、バングラデシュは、ネクスト11にリストアップされているように、前途有望な発展途上国でもあります。日本ではまだメジャーではありませんが、縫製業はこの国の経済成長に大きく貢献しています。お針子さんの月給は3,000～4,000タカ（5,000～6,000円位）位だそうで、安い人件費を活かして急成長しているようです。現在の主な輸出先は欧州や米国のようなのですが、今後は日本でもバングラデシュ製の服を見かけることが多くなるはずです。欧州ブランドの「H&M」もバングラデシュで生産していますし、日本の「ユニクロ」も中国・バングラデシュの企業と合弁会社を立ち上げ、バングラデシュでの製品生産を始めたところです。09年の夏には、バングラデシュ製のTシャツがユニクロの店頭に並ぶのではないかと思います。バングラデシュ経済界の人たちも、今後は日本市場を開拓していこうと努力しているようです。

### 5. 交通事情と「日本の橋」

こうした海外直接投資が積極的に行われるようになったのも、交通網の整備が大きく貢献しています。首都ダッカには内陸水面のための港はありますが、大きな船は入れません。コンテナ船などの接岸は200kmほど南東にあるバングラデシュ第二の都市、チッタゴンに着くこととなります。この間約250kmの国道は、この国の大動脈といえる重要道路です。90年頃までは橋梁も古く、幅員も6.7m程度の道路だったため、物流のネックとなっていました。日本



は、この幹線道路に90年代にメグナ橋（橋長930m、幅員9.3m、車道幅員7.2m、プレストレス・コンクリート箱桁（カンチレバー工法）+PCT桁）、メグナグムティ橋（同1,410m、他はメグナ橋と同じ）などの橋を無償資金協力で建設するなど、大きな貢献を果たしています。また、バングラデシュで最も知られている日本の援助もまた、「橋梁」です。

## 6. バングラデシュの「夢の懸け橋」

バングラデシュの中央を南北に縦断するジャムナ川（ブラフマプトラ川）はヒマラヤ山脈の北に発し、ヒマラヤ山脈の東側から南下し、またヒマラヤ山脈の南側を西へ進んだ後、南下してベンガル湾に注ぐ全長2,900kmの大河です。国土を東西に分断するこの川はバングラデシュ国内の交通を妨げる大きな要因であり、この川に橋を架け、東西をつなぐことはバングラデシュ国民にとって悲願といえる「夢の懸け橋」でした。日本はこの橋を建設するため、アジア開発銀行、世界銀行とともに1994年に資金協力をを行い、橋長約4.8km、幅員18.5m（4車+広軌鉄道）、スパン長100m、48径間のプレキャストセグメントのPC箱桁橋の「ジャムナ多目的橋」が1998年6月に完成供用されました。この橋には道路、鉄道のみならず、多目的橋の名のとおり電力、天然ガスパイプも添架されており、この国に無くてはならない存在となっています。そして、この橋はバングラデシュの100タカ紙幣と5タカコインの図柄にもなっています。



このほかにも日本はパクシー橋、ルプシャ橋などの大規模橋梁の架橋プロジェクトを実施しており、バングラデシュの交通網整備に大きく貢献しています。さらには、ジャムナ多目的橋の下流約120kmの地点に5km超の橋を架けるプロジェクトの計画にも技術支援をしています。日本はこうした交通関係のみでなく、教育、農村開発、保健医療、災害・気候変動対策など幅広い分野での経済協力をしています。

## 6. メイド・イン・ジャパン

こうした日本の協力は、バングラデシュの人々によく知られており、そのためか日本人というだけの理由でとても友好的に接してくれます。また、昔、日本にいたことがあるという人に、日本語で話しかけられるということがダッカ市内だけでなく、地方部でもありました。彼らは日本のことを「エクセレントカントリー」だと言ってくれます。かつて日本人がアメリカ、フランスなどに抱いていたのと同様に、彼らにとって「日本」は、世界の一流ブランドの国であり、憧れの対象なのかもしれません。メイド・イン・ジャパンはすべて一流商品として扱われ、町中を走る車のほとんどがトヨタ車で、日本の中古車が道路を満たしています。20年を超える日本製の中古車もたくさん現役で走っています。

世界有数の貧困国で、まだ半数の子どもたちは小学校を卒業することができないなど問題を抱えながらも、彼らからは、今を懸命に生きているというエネルギーを感じます。そして、「あなたは今幸せですか？」という質問に、「はい」と答える人の割合が最も高い国であるとの調査結果もあります。人間の幸せとは何か、考えさせられる調査結果でもあります。

この国に暮らしてみて、日本が如何に素晴らしい国で、日本人として生まれたことが、どれほど幸運で幸せなことか、バングラデシュの人たちから教えられ実感すると共に、日本人として自覚を持って、それに恥じぬように生きていくことが、国際社会の一員として必要なのだと気付かされる今日この頃です。